8. 体系的科学的な新しい漢字学習

石井方式では、「漢字を教える」ということを避けていますが、“漢字を教える”ことを全く否定しているわけではありません。

ただ初めは、“新出漢字”という改まった漢字学習ではなくて、

「新しい言葉を、漢字で学習する」

という考え方で、学習の目的を言葉におき、漢字はその学習のつけたしにすぎないというように気軽に扱い、読む機会を反復することによってその認識を深めていく、という方法をとって、読める漢字の教を増すことに努めます。

読める漢字の数が増えると、これを整理しまとめます。

意味の似たもの、反対のもの

字形の似たもの（休―体）

発音の似たもの（暑い―熱い）（険―検）

同じ仲間のもの（口―目―耳―鼻）

ついで、“部首”による体系的、科学的な漢字学習に進みます。

漢字の大部分は、“部首”と呼ばれる部品の組合せによって出来ています。例えば、当用漢字は 1850 字ありますが、それに使われている部首は 192 個です。192 個の部品がいろいろに組合せられて、1850 字の漢字が出来上っているのです。

だから、192 個の部品の持つ意味や性格を、その本質からよく理解していくならば、1850 字の当用漢字はもちろん、それに数倍する量の漢字の意味、読み方まで、おおよそ推察することが出来るのです。

例えば、「整」という漢字は、「束（ソク）」「攵（ボク）」「正（セイ）」の三つの部品によって組立てられていますが、これは、さらに、「束＝木、口（輪の形）」「攵＝ノ（棒またはむち）、又（手）」「正＝一（線）、止（足の形で、とどまる意）」と、それぞれ二つの部品によって出来ています。

「束」は、木に輪をかけて“たば”ねる。「攵」は、手に棒を持って“たたく”。「正」は、止まるべき線に止まる、つまり“ただしい”意味を表しています。

だから、「整」は、木を束ねて、不ぞろいになった所を叩いて、きちんと正しくすることを表した字であることが、その部首を見れば解ります。

漢字は確かに字形が複雑で、機械的にがむしゃらに覚えようとした

ら難しいものがかなりあります。しかし、その部品である“部首”を一つ一つ理解して、これを論理的に学習するなら、これほど易しく、楽しく覚えられて、しかも忘れにくい文字はありません。

コラム　諺

多芸は無芸

“何でも上手”とは何でもひと通りこなすというだけで、本当に上手なものはない。「二兎を追う者は一兎をも得ず」という戒めがあるように、ただ一つの道を選んでそれに力を集中させることが成功への近道だ、ということ。論語にも「君子は多ならんや」とある。

【芸】　旧字体は藝で、本字は埶で人がしゃがんで木の手入れをしている姿を表した字。今の“農芸”。それが人間として大切な技能であるところから今では“学芸”“芸能”と使われる。

【多】　月の変形の「夕」を重ねた形で“夕方を多く重ねる”から“おおい”ということ。

【無】　火の燃える様を表した灬と、ブという発音を表す無で“火で焼き尽くされて何もない”こと。

「棋、期、基、箕」……其

「募、暮、墓、暮」……莫

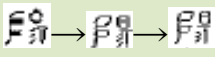
複雑に見える漢字も、上のように整理してみますと、共通した部分

コラム　諺

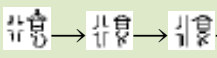
一陽来復

孔子が最も愛読したとされる「易経」にある言葉で、“悪いことが長く続いた後に良いことが回ってくる”こと。陽気の絶頂の夏至が過ぎると秋、そして冬至になる。しかし「陰極まれば、陽生ず」と言われるように冬至を過ぎると必ず陽気が回復すること。

【陽】　崖の意味の■と、“日の光のふり注ぐありさま”を表した■から、“日当りのよい崖”が本義。

 →陽

【復】　道路の形を表した彳の省略形亻「と「重なる」の“复”との合成字。“行った道を重ねて通る→かえる”こと。別の道を通って帰ったのでは復とは言えない。

 →復

が、それぞれの発音を表しており、その上、その言葉としての基本的な意味を持っていて、それを押さえて学習すると、漢字の複雑さは、困難どころか学習を助けることがわかります。

このような、体系的、科学的な漢字学習法が、従来の漢字学習には見られませんでしたが、私は新たにこれを打立てて、こういう学習をすべきだと提唱しているのです。

石井方式では、「社会科用語は社会科で、理、数科用語は理、数科で提出し、指導すべきである」と考えていますが、これは、石井方式の基本原則を実施すれば当然そうなるべきものですが、それ以上に、言葉を漢字と共に学習することが言葉の理解、および記憶を助けるからです。

「さんかく、ちょくせん、四しゃ五入、しゅく図、しゅくしゃく、がい数、がい算」は算数用語ですが、これを漢字で表記するとずっと理解しやすくなります。

「くっ析、しよう点、地下けい、さ岩、でい岩」（理科用語）では、言葉の意味を理解することが難しく、記憶も安定しませんが、漢字なら理解しやすく、記憶が安定します。

「だん流、こう水量、こう水、き権、内かく」（社会科用語）これらは、漢字で表記してこそ理解できる言葉であって、ぜひ、漢字で表記して指導していただきたいと思います。

「他教科で漢字を教える」と考えるからこそ負担になるように聞えますが、実は、その教科書学習に大切な役割を果している用語を理解しやすくするために、“漢字で学習”しているのですから、負担になるどころか、学習負担が軽くなるのです。

教科書に漢字を貼ることは、時間を取り、児童にとっても大変な負担ではないか、と考えられそうですが、実は、そうではないというのが、これを実施している先生方の一致した意見です。

黙々と貼付ける作業の中で、子供たちは、静かな、深い読みの学習をしている、というのです。それは、他の方法では得られない貴重な、価値ある学習だというのです。

転校しても困らない

漢字の学年配当表を無視して教えたら、学校により漢字学習の範囲が違って、転校の場合など困るだろうと心配される方が多

いようです。

私は小学校を卒業するまでに、学校が三つ変りました。この三つの学校が、三つとも方言を異にしていただけにとても苦痛でした。話す言葉がお互いに通じない、これはどの苦痛はほかにはないでしょう。これに比べたら、学習した漢字の違いなど、物の数ではありません。言葉の場合でも、泣くのは一週間です。一週間で溶け込んでしまいます。漢字で悩むのは、読めない漢字が出てきた時だけです。学習しない漢字でもかなり文脈から推して読めるものですから、読めないで困るということは、そうそうあるものではありません。それに学校差などというものは滅多にあるものではなく、あっても環境に順応しやすい子供はすぐその差を埋めてしまいます。

ご参考までに、ある母親の手記を掲載しましょう。

世田谷に住んでいました時に、テレビで東山小学校の石井学級の漢字教育を知り、とても感心しておりましたが、はからずも十二月の初めにこの学校に転校した子供は、石井学級に編入されました。

最初の二日間は、家に帰っても泣いておりました。国語はもとより、算数も、文章題は漢字で提出されているので、読めませんから解くことが出来ません。どうなることかと思っていましたが、三日目から猛然とファイトを燃やして漢字に取組み始めました。学校から帰ると、「今日は、こんな字を習ったよ。お母さん、この字知っている。僕知っているよ。教えて上げよう」

と、目を輝かせどうやらこうやらお友達に追付くことが出来たようです。（以下略）

かなばかりで書かれていた文章題をやっていたこの子が、石井学級へ転入して、いきなりやらされた問題は、

春男君は、色紙を 14 枚持っていました。妹に 8 枚やりました。残りは何枚でしょう。

自動車に男の子が 13 人、女の子が 6 人乗っています。皆で何人乗っているのでしょう。

というような問題だったのです。これでは、全く取付く島もなかったと思います。「家に帰っても泣いていました」とありましたが、学校でも問題が読めなくて泣いていたのです。教師としても、この時ほどつらい思いをすることはありません。しかし、これほど差のある場合でも、驚くほど早く、いつも追付いているのです。こういう転校生を毎年、何

人か受人れてきましたが、このひどい差に長く悩まされたことは一度もありませんでした。こういう特殊の場に置かれると、一年生でも、ひと月に二、三百の漢字が読みこなせるだけの能力は持っているように思われます。

漢字の学校差など、転校の際、全く問題にはならないことを、私は経験を通して、断言したいと思います。

コラム　**部首　莫**

で、草原の草の中に日が沈んだところを表したもので、“夕ぐれ”が本義。日が隠れて見えないので“ない”の意味にも。

【墓】　人生のくれ、終着所の土、つまり“おはか”。

【募】“夕ぐれの力（つと）め”。夕ぐれになると放牧の家畜を呼び集めるのが仕事。“呼び集める”こと。

【暮】　莫が“夕ぐれ”の本義を失ったので「日」をつけて“夕ぐれ”。

【慕】　“夕ぐれの心”。夕ぐれになると物悲しくなるから、“したわしい”気持を“夕ぐれの心”で表現。